

俺が戦う理由

「最近こういうデモやらが多いなあ。まるで昔の学生運動みたいだな」

自宅で家族揃って食卓を囲んで夕食を突きつつ、この時間は垂れ流しにしているテレビのニュースを小耳に挟みながら、親父が他人事のように呟いた。

「いや、俺たちの頃はもっと真剣に、この国の将来を考えて立ち上がったものだから。それに、このデモをやっている連中は自分の事ばかりしか考えない、我がままな奴ばかりだ」

昔、学生運動に入れ込んでいたらしい爺ちゃんは、こういうデモのニュースを見ると、昔の事を思い出して血が滾るらしいが、最近頻発しているデモはどうも余り気に入らないようだ。

そもそも一連のデモ騒動の始まりは、数年前に政府が外国人観光客の積極招致を掲げて、韓国人観光客への観光ビザ免除や、中国人観光客へのビザ発給要件緩和策などを次々と実施した頃に遡る。

お陰で、韓国人や中国人が日本に入国しやすくなり、ただでさえ多かった不法在留者が更に激増したのだ。

また、不法在留者の増加は外国人犯罪の増加にも拍車をかけ、日本人の犯罪者数は微減傾向を見せていたものの、それを上回るペースで外国人犯罪が急増して、治安の悪化は益々深刻化していた。

それに輪をかけて、政府の規制緩和政策の影響やら、FTA との絡みやら、少子化による人口減少社会における労働力不足の補填やら、様々な理由を適当につけた拳句に安易な移民政策を実施したものだから、中国や韓国ばかりでなくアジア各国や、ブラジルなど南米の日系人にゆかりの深い国やら、果てはアフリカ辺りからも大量の移民が押し寄せる事になった。

政府はその一方で治安の悪化を放置し、低賃金で働く移民を増やす事で国民から雇用を奪い、他方食い詰めた移民には生活保護まで与えて税金を浪費し、そういう連中はますます『差別、差別』と実態の伴わない理不尽な要求を繰り返しては、貴重な国民の血税から甘い汁を吸ろうと画策していた。

また、この所日本と中国や韓国との外交関係が悪化している事、韓国と北朝鮮の統一がいよいよ現実化してきた事などが、事態の悪化に拍車をかけていた。

一時期の余りに激しい反日行動に嫌気した日系企業が、とうとう中国離れを本格化させた事と、大幅な元レートの切り上げ、更には激化する民主化運動で、経済的にも疲弊の度が色濃くなって来た中国から、とにかく海外へ逃げようとする者が急増していた。

一方、北朝鮮ではかつて横暴の限りを尽くした将軍様も今は無く、殆ど国家は崩壊状態で、多くの難民が北朝鮮から国境を渡って韓国に流入していた。

更に、度重なる反日政策のリアクションとして、日本で急速に嫌韓感情が高まり、それまでは韓国にとって経済面でも重要な役割を担っていた日本との関係が疎遠になり、結果

として韓国の経済破綻に直結した。

その様な事情により、世界各国から、とりわけ中国や韓国からは、日本での不法在留を目的とした大量の人間が押し寄せてきていたのだ。

「なんだかんだといって、日本はまだまだ豊かなんだから、そういう困っている人をもっと受け入れてあげればいいんだ。それをけち臭く不法在留者摘発強化なんて、政府に情けというものは無いのか」

いわゆる団塊の世代で、いまや廃刊寸前の夕日新聞を未だに愛読する爺ちゃんはそういうが、それでは犯罪ばかりを繰り返す外国人がもっと増えて、自分の子供や孫が傷つけられたらどうするつもりだろう……と思ってしまう。

結局、爺ちゃんの世代は人口が多い分だけ、社会的な影響力も強い。

民主主義社会では数こそが力だ。

自分達の世代が行ってきた行為の結果が現代の様々な社会問題なのに、その事に対する何の責任も感じないで、他人事の様にそういわれては、さすがに頭に来る。

「爺ちゃんはそんな事いうけど、外国人犯罪が激増しているのは事実なんだ。こういうデモが起きるのはむしろ当然だし、国民の生命と財産を蔑ろにしてまで外国人を優遇する政府を許せなくたって、それは日本人としては当たり前だろ？」

「お前はまたそんな生意気を言うのか。そういう考えが戦争を生むんだ」

「だって、幾ら日本人が奴らと仲良くしようとしたって、奴らの側にそういう気が全くないって言うのは、これまでの歴史を振り返れば明らかだろ。それに、爺ちゃんは戦争の経験なんて無いじゃん」

「戦争体験の有る無しは関係ない。それに、言葉も文化も違う相手と分かり合うのには時間がかかるんだ。それを短絡的に片付けようとするから、すぐ争いごとになる」

「争いごとを仕掛けてるのは向こうだろ？」

「全く、あのインターネットの何とか言うウヨクの所にすっかり騙されて。大体、お前が和紀（かずき）にあんなウヨクの所を自由に見させているから、こういう風にすぐ騙されるんだ」

爺ちゃんは、普段は優しくて人もいいのだが、こういう話になると必ず言い争ってしまふ。

そして、少しでも分が悪くなるとすぐ親父に話を振って、例の『ネットのウヨクの所が……』と言い出すのだ。

こういう時の親父の返答も大体決まっている。

「そうは言っても、父さんだって未だに夕日新聞なんか読んでるだろう？ そういう意味ではどっちもどっちだと思うけどね。とにかく、夕飯の時ぐらいいはゆっくりと食べさせてくれよ」

ちなみに、爺ちゃんがいう『ネットのウヨクの所』とは、多分日本最大の掲示板サイト『W（ワロス）ちゃんねる』の事だと思う。

別にあそこはウヨクでも何でもなくて、色んなテーマ毎に話したい連中が集まってくるっ

てだけなのに、それが爺ちゃんには良く分からないらしい。

そもそも俺が爺ちゃんにウヨク認定されたのは、たまたま『Wちゃんねる』のニュース系板で、やはり中国か韓国関係のスレッドにカキコしているところを偶然目撃された時だった。

『何をしているんだ？』と、最初は興味深げにPCの画面を覗き込んで来た爺ちゃんが、俺が打ち込んでいる文章や、スレッドのその他のレスを見ていきなり怒り出したのだ。

昔、爺ちゃんが学生運動なんかをやっていたという話は聞いた事があったけど、そういう政治絡みの話なんて直接する機会がなかったから、ウヨクだ何だという話はした事がなかったのだった。

それが今では、ちょっとでも爺ちゃんの政治信条と食い違う発言を俺がすると、それこそ目の敵にされてしまう。

もちろん、俺だって爺ちゃんのそういう部分だけは絶対に間違っていると思うので、『間違いは間違い』といって一歩も引く気はない。

大体、俺がウヨクだったら、爺ちゃんなんか立派なサヨクじゃん。

それに、俺だって、大学には気の合う中国人留学生だって居るんだから、全ての中国人が犯罪者だと言っている訳ではないし、小学生や中学生の時にも何人も在日韓国人の知り合いだっていたんだから、韓国人の全てが悪いなんて言っていない。

でも、外国人犯罪が現実に深刻な社会問題で、国籍別に見れば中国人と韓国人が圧倒的に多いのだから、外国人犯罪を問題視して、そういう不貞外国人の入国を容易にする政策に批判が出るのは当たり前だと思う。

最近治安悪化とか、外国人政策に関連したデモが本当に増えた。

日本人の側もそうだけど、移民政策やらで国内に急増した外国人の側も反発する様によくデモをする。

一般の新聞・テレビメディアでは余り取り上げないけれども、そういう外国人のデモを煽っているのが、最近ではすっかり化けの皮も剥がれて生き残りに必死のサヨク系団体や、韓国〇潭を始めとする韓国系の団体らしい。

爺ちゃんとまたやりあってしまって、すっかり食欲も失せた俺は、このまま爺ちゃんと顔を突き合わせるのも嫌になって、自分の部屋へと早々に引き上げる。

で、早速『Wちゃんねる』の該当スレッドを見ると、案の定、先程のニュースで見たデモの体験レポートなるレスがついていた。

こういう掲示板サイトの匿名のカキコに、どの程度の信憑性があるのかはともかく、既存メディアからは得られない生の声という意味では、こういったレスもある意味貴重な情報といえる。

もちろん、こういったレスにはソースもつかないし、責任の所在もわからないから、パッと見て盲信する訳には行かないと言う事は、今更敢えて言うまでもないのだが。

そのままニュース系の板を何となく見回っていると、『野党連合が今度は帰化条件緩和を画策か？』とか、『やっぱり中国人観光客へのビザ免除は行われるらしい』などといっ

た、余り気分がよくない……というよりも、ますます日本国民が住み辛くなる様な鬱なスレッドがたくさん立っている。

全く、政府といい、国会議員といい、この国を動かしている連中はどうして国民の足を引っ張り、私的な利益の為に国を売り渡す様な行為ばかり働くのだろうか。

こういう連中のことを『売国奴』というのだろうか。

更に気になるスレッドとしては、『もう何回目？ 野党連合が人権擁護法案提出』なんというものもある。

これは、以前から野党がしつこく国会に法案提出するものの、不当な言論弾圧に繋がる等、余りに弊害が大きいとして、これまでは審議すら見送られてきた法案だ。

口では『人権擁護』などといっても、要は国内外の差別利権集団が、最近危なくなってきた日本国内での自分達の権益保護に必死の形相で、自分達に対する批判の声を封じ込める為に人権問題を悪用しているに過ぎない。

こういう人間がいるからこそ、その影で進行するもっと悪質な人権侵害が放置されてしまうのだから、差別利権集団自体が人権侵害を行う張本人といっても良いくらいだ。

こういう人間こそ『人権』とか『差別』などと騒ぐ前に、まず自分の行動なり言動をよく反省して改めてもらいたい。

「はぁ、それにしても、なんで世の中にはこんなに鬱な事件ばかり起こっているんだろう」

『Wちゃんねる』のニュース系板を見るのは、半ば日課みたいなものになっているのだが、今日はなんとなく気が乗らない。

俺はPCの電源を落としてベッドに横になると、そのままとうとうとしてしまった。

*

鉛色の雲が天上の一面を覆っていた。

今にも雲が落ちてきそうな程、厚く重く垂れ込めている。

その雲の影響を諸に受けているからなのか、町に漂う空気もどこか粘ついて重苦しく、思わず喉を詰まらせてしまいそうな錯覚に襲われてしまう。

町には彩りが全くない。

すべての色がこの世から消え失せて、白と黒のモノトーンの世界に迷い込んでしまったかの様に、目の前のものが全て一面のグレイカラーに染まっていた。

昔から良く知っている活気ある町並みだった筈なのに、今は生命の息づく気配さえ感じられない。

かつては路肩に多くの店が立ち並び、町でも人通りの多い華やかな商店街だった筈だ。

しかし、今はすべての建物が鉛色の壁に閉ざされて、その壁の向こう側にも人っ子一人いる様な気がしない。

とてもよく知っている町並みの筈なのに、どこかの見知らぬ廃墟に迷い込んでしまった

様な感覚は、一体何なのだろうか？

俺は、注意深く町の風景を観察しながら、ゆっくりと道の真ん中を歩いていた。

ふと気がつく、こちらへ向かって何かが近づいてくる。

最初は、紙くずが風に煽られて飛ばされている様に感じたのだが、人が小走りでこちらへ向かって来るのだと気付いたのは、彼らがかなり俺に近づいて来てからだった。

三人の男が、やはり全員がモノトーンの薄汚れた服を身にまとい、生気のない眼差して俺を見て、恐怖の表情に顔を歪めながら、口々に何事かを叫んでいる様だった。

「あの、どうしたんですか？」

俺はそう問いかけたが、先に走ってきた二人は、まるで俺がそこにいる事など気付かない様に、そのまま無視して走り抜けていった。

「あの、一体どうしたんですか！」

背後に消えていく二人の慌てぶりに、ただならぬ不安感を覚えた俺は、三人目の男こそは絶対に呼び止めようと、少し声を荒げて呼びかけた。

男は恐怖に怯えた表情を俺に向けたまま、ふと立ち止まって、言った。

「中国軍だ。奴らが上陸してきやがった。お前もさっさと逃げた方がいいぞ」

そういい残すと、男は再び、くしゃくしゃに折れ曲がった紙くずが風に煽られる様に、よろよろと俺の背後を更に奥へと走っていった。

——中国軍って、一体どういうことなんだ？

俺には全く訳がわからなかった。

なんで中国軍が上陸してこなくちゃいけないのだろうか？

「ちょっと待って！ 一体どういうことだか……」

そういつて俺が振り向いた時には、既に男達の姿は見当たらなかった。

一体何がどうなっているのか訳が分からなかったが、一つだけ確かな事があるとすれば、背後に逃げていった三人は嘘をついているとか、俺を騙そうと演技している様には見えなかった。

彼らが俺にその様な嘘をつく理由が見当たらなかったし、彼らが俺にその様な嘘をついても、何の利益になる筈もない。

だったら、『中国軍が上陸してきた』とはどういう事だろうか？

大体、街中に全然人がいないと言う事自体が良く分からない。

ともかく、何かやんごとなき事態に巻き込まれたという事だけは理解出来たので、とにかく知っている人を探して、この訳の分からない状態が一体どういう事なのかを聞かなくてはならない。

俺は脇道に入り、取りあえず自分の家を目指して走った。

家に戻れば、親父か、母さんか、爺ちゃんがいる筈だ。

そういえば……と、俺は走りながらも、『Wちゃんねる』を始めとしたネット経由で知った、俺達の常識に照らすと俄かには信じ難い、中国人の恐ろしい性質についての記憶を辿っていた。

中国人は古来から人を食うのだそうだ。

かの有名な三国志にもその様なシーンが出てきたり、あの孔子も人肉食を好んでいたらしい。

最近でも、胎児食いが『精がつく』などといって珍重されているという話も聞く。

それに、中国人は昔から大虐殺を繰り返してきた。

かつて日本軍が大陸に進駐していた時の首都攻防戦も、後になってから大虐殺などというプロパガンダに摩り替えられて、日本の対外的イメージを大きく損ねる要因となったのだが、そもそも日本人は歴史的に大虐殺などやったことはない。

時折戦乱の時代はあったから、その度に人は死んだが、敵軍ばかりでなく、その領民まで皆殺しにするなどという野蛮な行為は、日本では有史以来行われていない筈だ。

しかし、中国人は余りに呆気なく人を殺すし、歴史的にも大虐殺を良くやってきた。

つい最近では、中国共産党の『大躍進』とか『文化大革命』といった相次ぐ愚策の影響で、推定一億の人民が殺されたと言う話もあるくらいだ。

中国が侵略したチベットや東トルキスタンと言った場所では、今でも組織的な先住民族虐殺及び中国人の入植政策が計画的に実施されていると聞く。

ちなみに、チベット侵略で名を上げて、遂には国家の最高権力者にまで上り詰めたのが胡〇涛総書記だ。

ましてや、前任者である江〇民政権時代に推進された反日教育の影響は色濃く、『日本人を人間とは思っていない中国人』が大量にいて、そういう連中が手っ取り早く犯罪で稼ぐ為に日本に密入国しているのだ。

だから、中国人は日本人に対して容赦がなく、平気で恩を仇で返す。

日本の篤志家が、『日中友好』と『苦学している中国人留学生の為に』と様々な支援活動をしていた所、『きっと金持ちに違いない』と、その篤志家を襲った中国人留学生もいた。

事件当初は、その留学生がたまたま悪質な人物だと言う認識が支配的だったのだが、今ではその認識が間違いであると考える人も少なくない。

元々中国人は、日本人の事を『自分の親や祖父母を傷つけた敵なのだから、どんなに酷い仕打ちをしても構わない』と考えているのだから、その様な危険な連中が日本国内に大量に存在する事は、自分達日本人の生命にかかわるのだ。

もちろん、中国人にもいい奴はいる。

例えば、俺の知り合いの中国人留学生がそうだ。

だが、それは奴が中国人としては特殊なだけで、やはり大半の中国人は俺達にとって危険な存在だ。

そんな中国人が日本に上陸してきたら、一体日本はどうなってしまうのだろうか？

しかも、中国軍だというなら戦闘のプロであり、武器も豊富に持ち込んでいるのだろう。

そんな連中が日本に悠々と上陸してきたら、きっと日本人は全員虐殺されて、日本と言う国はこの世界から跡形もなく消え失せてしまうに違いない。

俺の脳裏に、かつて通州事件の被害者となった日本人居留者が、どの様な酷い陵辱の果てに虐殺されたか、上海事件で日本領事館に立てこもった外交官らがどの様な運命を辿ったのかが思い起こされた。

ああ、こんな事をしているうちにも、親父や、母さんや、爺ちゃんが中国軍の兵士に酷い陵辱の果てに惨殺されていたらどうしよう。

そう考えたら、俺はいてもたってもいられなかった。

早く家に辿りついて、親父や母さんや、爺ちゃんの元気な顔を確認したかった。

そういえば、亜沙子はどうしているのだろうか？

亜沙子は大学で知り合った、同い年の仲の良い友達と言った間柄だ。

俺は以前から結構気になっているのだが、未だに告白出来ずにずるずると生温かい友人関係が続いているのだ。

お互いにそこそこ気も合う様だから、亜沙子も俺の事をまんざらでもないと思っているのかも知れないが、実際にそれを確認する勇気も湧かず、亜沙子の本心を知った事でこれまでの生温かい関係まで壊れてしまう事が怖くて、どうしても切り出せずにいた。

ただの俺の片思いだ。

そんな亜沙子の事が、俺はとても気にかかった。

取りあえずは自分の家に一旦戻って、それから亜沙子の家に行くか？

亜沙子は北海道出身の為、大学の近くにワンルームマンションを借りて、そこから通学している。

俺は自宅から電車で通学していたから、亜沙子の部屋と俺の自宅とはかなりの距離があったが、それでも亜沙子の事が気になって仕方がなかった。

たとえ片思いとはいえ、俺にとっては家族同様か、それよりも大切な人なのだから。

でも、今は自宅の近所にいるのだから、まず家族の安全を確認するのが先だ。

俺は、自宅に面する通りに勢い余って飛び出して、慌てて後戻りすると、そこに立つ家の門から生垣の中に入って、生垣の隙間から通りの様子を垣間見た。

——銃を抱えた兵士だ。

これまでの状況から察すると、多分中国軍の兵士なのだろう。

兵士は銃を抱えたまま鋭い視線を時折周囲に巡らせつつ、通りを二度、三度と行き交っている。

幸いにも気付かれなかったらしい。

俺は息を潜めながら、内心胸を撫で下ろしたが、同時に、このまま身動きも取れずに留まるしかない膠着状態に置かれた事に気付いた。

下手に動いて中国兵に見つかれば何をされるか分からないし、かといってこのままここに留まってもどうしようもなかった。

もし、奴らが一軒一軒住宅を家捜ししているのだとしたら、こんな所にはすぐに見つかってしまう。

しかし、既に目と鼻の先に中国兵がいるのだから、少しでも不審な動きを見ればすぐ

にでも気付かれてしまうだろう。

——どうか、中国兵に気付かれませんか様に、靖国の英霊よ、お守り下さい。

俺は息を殺して目を閉じ、その場に蹲って一心に祈り続けた。

＊

うぐっ……。

俺は喉を締め付ける息苦しさに、思わず目を覚ました。

まさか……慌てて周囲を見回したが、どうやら自分の部屋にいる様だ。

それにしても、幾ら寝しなに中国・韓国絡みの余り好ましくないカキコを見ていたからと言って、あんなに気味の悪い夢を見るとは思わなかった。

全身がぐっしょりと汗をかき、肌にぴったりと吸い付く下着が気持ち悪い。

「そっか、昨日はシャワーも浴びずに眠っちゃったのか……」

俺は何とか昨日の寝しなの記憶を頭の奥底から掘り起こすと、取りあえずこの拭い難い生理的嫌悪感だけはさっさと払い除けようと、まっさらの下着だけを掴んで階下の浴室に駆け込んだ。

頭からシャワーの温かい水滴を浴び、ジトジトと皮膚に粘りつく脂汗の嫌な感覚とともに、つい先程まで魘されていた奇怪な夢の記憶を洗い流したくて、そのままボディソープでざっと全身を泡立てた。

それにしても嫌な夢だ。

俺は、白い泡に夢の記憶と嫌悪感を混ぜ合わせて、すべてをシャワーで洗い流した。

それですべてが洗い流せる様な夢ではなかったが、何もしないよりは多少はマシな気がした。

「和紀、早くしないと遅れるよ」

俺がシャワーを浴び終わるのを待っていたかの様に、母親の声が背中越しに聞こえる。

「やべ」

俺は慌てて服を着替えると、パンを一枚口に咥えたまま家を飛び出し、いつも通学に使っている列車にギリギリで飛び乗った。

それから一時間程列車に揺られて、都心に程近いキャンパスの最寄り駅に到着する。

昨晚の寝覚めの悪い夢の影響なのか、それともただ単に日頃の不摂生が祟っただけなのかは分からないが、午前中の講義の間は絶えず眠気が襲ってきて、全く講義の内容を覚えていなかった。

ようやく少し眠気が収まった頃には、そろそろ昼時を迎えようとする時刻だった。

「お前、さっきの講義の間中ずっと寝ていただろ？ ベロハチがお前を睨んでたぞ」

俺が眠い目を擦りながら学食に入ると、真っ先に学友の青山が声をかけてきた。

ちなみに、『ベロハチ』というのは、学校でも少々有名な……講師の名前だ。

いつ、どういう由来で『ベロハチ』と呼ばれるようになったのかは知らないが、何とも

珍妙なニックネームだ。

「あーあ。さっきの講義ってペロハチのだったっけ？ やっぱー。あいつに一度目をつけられると、後が大変なんだろ？」

「……らしいな。なんつったって、名前からして怪しさ満載のペロハチだからな。まあ、後でどんな目に遭うかは知らないが、気が向いたらその時の『笑えるペロハチ粘着レポート』でも見せてくれよ」

「けっ、他人事だと思ってふざけやがって……」

「そうは言ったって、お前がペロハチの講義で堂々と居眠りしてたのがいけないんだろ？ まあ、自業自得って奴だな」

「はぁ、がっくし……。まあ、確かに後でペロハチの復讐を受けるのは仕方ないとしても……。なあ青山、さっきの講義のノート、コピーさせてくれないか？ 俺、見事なくらいに全然講義の内容分からないからさ、せめてそのくらいは……」

「お前だって俺の性格よく知ってんだろ？ 俺、ノートとか苦手だから勘弁な。そういうのだったら亜沙子にでも頼んだらどうだ？」

「何を私に頼むって？」

俺と青山が二人で昼食をとりながら、後々に予想されるペロハチからの様々な仕打ちに怖気づきながら雑談を交わしていると、タイミングよく亜沙子が俺の隣の席に腰掛けてくる。

「いや、さっきのペロハチの講義だけどさ、居眠りして全然聴いてなかったから、せめてノートのコピーでも取らせてもらえれば……って」

「あはは。そういえば、さっきの講義で、大軒搔いてたね。随分珍しいなって思ってたんだけど、どうかしたの？」

「いや、それがさあ、タベなんか変な夢見て魔されちゃって、寝不足気味なんだ」

俺は、青山と亜沙子に、昨夜見た不思議で不気味で不愉快な夢の内容をかいつまんで説明した。

もちろん、亜沙子に面と向かって『夢の中で亜沙子が気になって仕方がなかった』なんてとても言えないから、その部分だけは伏せてた。

二人とも神妙な面持ちで俺の夢の話に聞き入っていたが、中国人留学生で俺達とも比較的仲の良い趙（ちょう）が、いつの間にか斜向かいの席で俺の話に聞き耳を立てている事に気づいた。

「サメシマさんが中国人に差別の気持ち持っているの、悲しいですね。確かに中国人も悪い人いる。でも、私悪い事しないですね」

「ちょっと待って。今話したのは昨日見た変な夢の話で、俺が中国人をみんな悪い奴だと思っている訳ないだろ？ 趙さんがいい奴だっていうのは、俺達みんな知ってるんだし」

「それ聞いて少し安心しました。私も悪い中国人がいる事悲しいですね。でも、いい中国人もたくさんいる事知って欲しいです」

ふと、趙は、同じ中国人留学生仲間の曹（そう）に声をかけられ、中国語で何事かを交わしていたかと思うと、おもむろに立ち上がった。

「もしかして、また行くのか？」

青山の問いかけに、趙は無言のまま頷いた。

「中国人の人付き合い、大変ですね。行かないと後で何されるか分からないですね」

そういい残して、学食を去る趙と曹のふたりを見送りつつ、最初に青山が口を開いた。

「あの曹の事だから、きっとまた趙を怪しいデモにでも動員する気だな」

「まァ、趙の事情も分からなくはないけど、怪しいデモは勘弁して欲しいよな。まさか、今朝の夢みたいな事が起こるとは思いたくないけど、それでも『移民受け入れ促進デモ』なんてやられた日には、ちょっと引くよな。だって、あいつら留学生なんだし」

「でも、趙君だって付き合いで仕方なくって言っているんだし、余り悪く言うのは可哀想だよ」

さすがは『Wちゃんねる』住人であり、ニュース系板の巡回を日課としている俺と青山は同意見だったが、『Wちゃんねる』に余り良い印象を持っていない亜沙子とは食い違ってしまう。

「亜沙子は優し過ぎ……っていうか、ちょっと甘いよな。確かに趙自身は違うかもしれないけど、曹なんて完全に怪しいし、趙にしたって今は普通に見せかけていても、いつ牙を剥き出しにするか分からないんだから、まず疑ってかかるくらいでちょうどいいんだ」

「青山君の言う事なんて、どうせまた『Wちゃんねる』ネタなんでしょ？ 鮫島君はどうなの？」

「亜沙子の気持ちは分からなくはないし、青山のいう事はちょっと極端かもしれないけど、でも間違った事は言っていないから。こんな事を言うと俺も青山みたいに『Wちゃんねるに毒されてる』って思われるかもしれないけど、実際に中国人はちょっとヤバ過ぎて事を証明するソースは幾らでも見つかるんだから、それを知ったら亜沙子だってきっと疑ってかかりたくなるって。それくらい俺達日本人の常識は中国人の常識とかけ離れているんだから」

「ふーん。やっぱり鮫島君も『Wちゃんねる』に毒されちゃってるんだね。確かにそういうニュースもたくさんあるのかもしれないけど、だからといって頭から他人を疑ってかかるのって、なんだかとっても寂しいよね」

俺には、自分や青山のいう事が百パーセント正しいという自信はあったが、それでも亜沙子に妙な偏見を持っていると誤解された様な形になってしまった事がショックだった。

『亜沙子だって、新聞やテレビメディアが報じない膨大なニュースを丹念に追いかけていけば、絶対に俺と同じ結論を出すに決まっている』との確信はあるが、人が一度持ってしまった先入観を覆すのは容易ではない。

亜沙子が『Wちゃんねる』に余り良い印象を持っていない理由は知らなかったが、あくまでもあそこは様々な意図を持った人が集まるコミュニティに過ぎない……という事くらいは理解して欲しい。

＊

ふと瞼を開けると、俺の目の前には埃を被って薄汚れた生け垣があった。

まさか……。

思わず背後を振り返ると、見覚えのある家が生气なくぽつんと佇み、その遥か上には一面を覆う鉛色の雲の群れが、今にも落ちて来そうな程厚く重く垂れ込めていた。

「そういえば、中国兵は？」

ようやく自分の置かれた状況を把握した俺は、生け垣の隙間に目を凝らしてしばらく様子を伺う。

しかし、先程まで生け垣の向こう側の通り沿いに居た筈の中国兵はおろか、人っ子一人いる気配さえ感じられない。

人どころか、自分以外の普く生命の息吹が奪われてしまったといっても過言ではないくらい、辺りは不気味な静寂に包まれていた。

それでも俺は慎重の上にも慎重を期して、もうしばらく生け垣の陰に身を潜めていたが、そのまま十分経っても、二十分経っても全く変化は現れない。

直感で三十分程が経過したと思った時には、いい加減焦れてしまったので、思い切って生け垣から恐る恐る顔を上げた。

生け垣を隔てた通りには、やはり誰もいない。

つい先程まで中国兵がいた筈なのだが、どこへ消えてしまったのだろうか。

それとも、実はあれからかなりの時間が経過しているにも関わらず、単に気づかなかっただけなのだろうか？

俺は尚も慎重に周囲を警戒しつつも、生け垣を回って通りに出てみた。

かつては、明るい日差しを全身に浴びて鮮やかな色の花をつけていただろう庭の草木も、明け方になるとうるさい位に元気よく囀っていた野鳥の姿も、今は全く消え失せてしまっている。

まるで、天上に深く垂れ込める鉛色の雲が、地上にある全ての彩りを拭い取って、単調なモノトーンに染め上げてしまった様に、薄汚れたグレーカラー以外の全ての色彩が失われていた。

ここまで完璧に生气が失せていると、さすがに『中国兵どころか、自分以外の全ての生命が既に存在していないのではないか？』という錯覚に襲われるが、尚も慎重に息を潜め、路肩に立ち並ぶブロック塀や生け垣に体を沿わせながら、どのような些細な変化も見逃すまいと五感を研ぎ澄ましていた。

そして、自宅に面した路地の様子を何度も何度も繰り返し伺ってから、意を決して早足で飛び出した。

幾ら全く生物の気配がしないからといって、未だに中国兵が周囲を徘徊していないとは限らないので、少しでも物音を立てるような動きは控えた。

とりわけ全力疾走などはもっての外だ。

反面、一刻も早く物陰に隠れなければ、いつ中国兵が路地の曲がり角から出てくるかもしれないし、自宅にいる筈の両親や爺ちゃんの様子も気になったから、気持ちが逸る分だけ早足になってしまって、ついつま先が縋れそうになる。

それでも、何とか中国兵に見つかることなく、無事自宅の門に辿り着くと、門扉の前にしゃがんでひとつ小さな溜息をついた。

そして、改めてもう一度気合を入れなおすと、鉄の門扉がけたたましい呻き声を上げないように少しずつ隙間を開けて、自分の体がすり抜けられるだけの間隔が開いた時点で、するりと頭から自宅の敷地内に滑り込んだ。

これで門扉さえ閉めてしまえば、当面外の中国兵を余り気にする必要はなくなる。

俺は耳と手先に全ての意識を集中して、微かな雑音も漏れないように細心の注意を払いつつ門を閉めてから、身を低くして家の外壁に背中を密着させ、壁伝いにゆるゆると裏庭に回りこんだ。

先程まで家の周囲に中国兵がいたのだから、屋内に別の中国兵がいないとはいえないし、もしかしたら先程見かけた中国兵が、今頃屋内に潜んでいる可能性だってありうるのだ。

だからこそ、家に入る前に、まずどこかの窓ガラスからでもよいから、家の内部の状況を確認しておきたかった。

幸いにも、家の周囲はブロック塀で囲まれていたから、隣の家の上階の部屋からでも覗き込まなければ、外から家の敷地内を見渡す方法はなかった。

もし、今隣の家の上階から中国兵に目撃されれば、一たまりもなく射撃訓練の標的にされていただろうから、むしろ思い切って屋内の状況に意識を集中できる。

俺は、壁伝いに裏庭へ回り、どこことなく土埃で薄汚れたような、何となく煤けて見えるガラス窓の向こう側を恐る恐る覗き込んだ。

厚く垂れ込めた雲の塊が太陽の光を極限まで遮っていたから、外は昼間なのか夕方なのか判断がつかないくらい、先程から薄暗いままだったが、屋内はそれに輪をかけて暗く、静まり返っていた。

かといって、新月の宵闇の濃密な暗さとは違って、どこかぼんやりと濁ってぼやけた様な、なんとも微妙な曖昧さを漂わせた陰に包まれていた。

例えて言えば、淡い墨絵の影と表現すればよいだろうか。

それは、よくよく目を凝らして見れば、ぼんやりと淡い光の傘に覆われているような気もしたので、黒の絵の具で塗りたい漆黒の闇とは、また大きく違って見えた。

時間が経つにつれて薄闇の明るさにも目が慣れてくると、今まではぼやけてははっきりしなかった薄闇の正体が、徐々にはっきりと姿を現してくる。

ガラス越しに見える居間は外よりもかなり薄暗かったが、親父の姿も、母さんの姿も、爺ちゃんの姿も見えないことだけははっきりしていた。

——みんな、どこへ行ってしまったんだろうか？

俺は、一度深く深呼吸すると、意を決して窓ガラスをスライドさせ、自分が通り抜ける

れるだけの隙間から屋内に滑り込んだ。

幾ら昔からの住み慣れた家といっても、余りの激しい変わりように、俺は思わず靴のまま上がりこみそうになったが、ふと思い直して静かに靴を脱ぎ捨てた。

もし中国兵が既に屋内に潜んでいたとしたら、今靴を脱ぐ行為は途轍もなく愚かだったが、いずれにしても中国兵と接触すれば逃れようもなく、呆気なく命を失ってしまうに決まっているのだ。

それよりも、自分の家に靴のまま上がりこむ行為の方が、俺にとっては強い違和感を生じさせた。

俺は、一階の部屋を、リビングダイニングから、客間、爺ちゃんの部屋、浴室、果てはトイレまでをもくまなく回ったが、三人の姿はどこにも見当たらない。

中国兵の姿が見えないのはある意味ラッキーだったが、親父や母さんや爺ちゃんの姿までもが見当たらないのは、少々解せなかった。

しかし、改めてよく考えてみれば、さっき商店街で見かけた三人だって『中国兵が上陸してきた』といって逃げてきたのだから、親父達も予め何らかの手段で中国人の襲来を知って避難していた可能性もある。

だったら、なぜ俺だけがここに置き去りにされているのか……なんて、自分自身にも訳のわからない疑問にはこの際触れないでおく。

それを言い始めたら、親父だって本来なら仕事で家にはいないかもしれないし、俺は学校から帰る途中だったのかもしれない……恥ずかしい事に、自分自身がいつの間にこのような訳の分からない事態に巻き込まれたのか、見事なまでに記憶が消し飛んでいたのだ。

とにかく、まだ二階は確認していないのだから、三人とも二階に隠れているのかもしれないし、もし二階に誰もいなかったとしても、どこかに逃げて無事にいるかもしれないのだ。

そうすると、一体どこへ逃げてしまったのかは全く手がかりがないのだから、再び中国兵に遭遇する危険を冒しても当てどなく探し回るか、そのうち戻ってくる事を信じて延々とここで家族の帰りを待ち続けるしかない。

いや、ここで待ち続ける訳にはいかなかった。

もし二階に家族が居ようといまいと、俺はそのまま亜沙子の様子を見に行かなくてはならない。

この状態では電車が動いているとは思えないし、そうすると都心に程近い亜沙子のマンションに辿りつくまでには相当な時間がかかるだろうが、たとえ何時間かけて歩いたとしても、亜沙子に会いに行き無事を確認しなくてはならない。

俺は、一歩足を踏み出す度に微かな軋み音が漏れる階段を、身の縮む思いに耐えながら、一步一步慎重に上がっていった。

二階には、両親の寝室と俺の部屋がある。

俺はあえて、普段は滅多に近づかない両親の寝室から確認することにした。

俺の個室に三人が隠れるのは、幾らなんでもちょっと狭すぎると感じたからだ。

薄暗い廊下の中で唯一鈍く光っているドアノブを両手で柔らかく包み込むと、思わず息を止めて、じわじわと少しずつドアノブを捻ってゆく。

カチッ！

心臓を飛び上がらせる微かな金属音が、薄幕の靄と静寂に包まれた廊下に鳴り響き、次いで耳の穴を穿り返すような奇妙な軋み音とともにドアに隙間が出来た。

瞬間、俺の全身がこの先自らを襲うかもしれない運命を思って凍結したが、そんな根拠のない恐怖も単なる杞憂に過ぎないと徐々に理解していった。

もしこの家にまだ中国兵が潜んでいたとしたら、絶対に今の軋み音に気づいた筈だ。

それでもなんら生命の存在する気配が感じられないのだから、この家には中国兵など存在しないという言う結論になる。

果たして端から中国兵など侵入していなかったのか、俺が訪れる以前に立ち去ってしまったのかは分からないが、当面屋内で中国兵に遭遇する恐怖に怯える必要はなさそうだ。

俺は少々大胆になって、両親の寝室の扉を思い切って開け放った。

就寝時以外は滅多に訪れないであろう部屋の窓ガラスはカーテンで覆われ、ただでさえ薄暗い外光は殆ど届いていなかったが、それでも室内に誰もいないことは一目瞭然だった。

俺は、念のためにベッドの下やクローゼットの中を覗いてみたが、やはり人はおろか僅かな生命の痕跡すら認められない。

後は俺の個室を残すのみ……。

「……まさかな」

母さんが時折部屋の掃除と称して立ち入る以外は、これまでに俺以外の家族がこの部屋へ立ち込んだ記憶は殆どなかったから、もう半ば『三人はどこかへ避難したんだろう』と思いつつも、念のために自分の部屋も覗いてみる。

俺はかなり軽い気持ちで扉を開けると、まずむっと鼻を突く異臭がドアの隙間から立ち込めて、思わず扉を一旦閉めてしまった。

もちろんこんな経験は初めてだし、室内の状況を確認する勇気も沸かなかったが、俺の勘が咄嗟にこの異臭を『血の臭い』と判断していた。

瞬間、俺の脳裏に血塗れの三人の顔が掠めたが、はっきり顔を確認するまでは断言できないとすぐに思い直し、再度意を決して扉を開け放った。

室内に充満する血の異臭に顔を背けつつも、自分自身に二度、三度と言いつつも、かつて自分が愛用していたベッドやテーブル、その他の小物類へと順番に目を凝らす。

全体がモノトーンの薄暗い影に覆われる中で、唯一床を濡らす粘性を帯びたどす黒い流血の跡が、俺の視線を釘付けにする。

よく見ると、ページュの壁紙のあちこちに飛び散った血糊の跡が残っていて、この狭い室内で何らかのただならぬ騒動があった事を窺わせる。

俺のベッドは堆く盛り上がり、その上に無造作に掛け布団が覆い被さっている。

その下に何が積み重ねられているのか、俺には半ば想像がついていたし、それを見たいとは露ほども思わなかったが、心の意に反して俺の腕は勝手に掛け布団を捲り上げていた。

布団の下にある物を目の当たりにした時、俺の体は凍結したまま身動きがとれずに、目の前に現れた常軌を逸した光景にただただ目を奪われていた。

かつては俺の家族だった血塗れの三つの遺体が、ベッドの上に仰向きのまま無造作に折り重なっていた。

もうそれだけで充分凄惨な光景だったが、より注意深く三つの遺体を詳細に観察すれば、更に筆舌に尽くしがたい、この世に存在する者の所業とは到底信じ難い有様を目撃したに違いない。

しかし、俺はそれ以上の精神的ショックには耐えられそうになかったので、慌てて掛け布団を元あったように遺体に被せて、バタバタと周囲に聞こえてしまうだろう大きな足音を鳴らしながら、かつては自分の部屋だった惨劇の現場を後にした。

結局、幾ら時が流れて時代が移り変わっても、中国人の本質は昔から全く変わっていないし、かつて通州事件で多くの日本人が受けた酷い仕打ちを、現代でも眉一つ動かさずに平然とやってのけるのだ。

俺は、余りにこれまでの日常とはかけ離れた衝撃に打ちのめされ、涙を流して嘆き悲しむ気力さえ失っていた。

しかし、そんな燃えカスの様になってしまったにも拘らず、亜沙子の事だけは尚も気にかかっていた。

＊

ふと気がつくと、俺はベッドの中にいた。

思わずはっと息を吞んで辺りを見回すが、先程までこの部屋中に禍々しく刻印されていた筈の、血塗れの遺体も飛び散った流血の痕跡も残っていない。

『中国兵が日本に上陸したらしい』という例の夢が気になって仕方がなかったからなのか、いつの間にかウトウトとしてしまい、その影響でまた変な夢を見てしまったということなのだろうか？

まるで例の夢の続きとでも言わんばかりに、なんとも悲惨な結末を迎えてしまった夢…いや、あの夢にはまだ続きがありそうだったが、いずれにしても寢覚めの良い夢ではない。

というか、余りにリアルな夢の感覚が未だに体の節々に残っていて、縁起の悪い事この上ない、実に嫌な気分が目覚めとなった。

俺は昨日同様、変な夢の気持ち悪い感覚を一刻も早く忘れたくて、下着だけを手にまた階下の浴室へと直行してシャワーを頭から浴びる。

幸いにも今日は休日なので、時間を気にせず心行くまでシャワーを浴びていられる。

俺は、二度、三度と体中にこびりついた血糊の跡を削ぎ落とすように、全身を納得行くまで洗い流してから、浴室を後にした。

「和紀、お前こんな時間まで寝てたのか？」

俺を呼び止めたのは、居間のソファに寝転がってぼんやりとテレビ画面を眺めている親父だった。

「母さんと爺ちゃんは？」

先程の夢の記憶が鮮明に残っていたから、思わず気になって姿の見えない二人の行方を聞いてみる。

「ああ、母さんは町内会の集まりとかで隣へ行ったな。爺ちゃんは買い物だとさ。またタバコでも買いにいってるんだろう」

——そりゃ、そうだよな、あれはただの夢なんだから……。

俺は、毎週のように繰り返される休日の何気ない光景を見て、『いつもと何も変わらない』と妙に納得して安心すると、一旦自分の部屋へ戻って服を着てから、もう一度一階へ降りる。

台所でいつものインスタントコーヒーを入れると、一口、二口と啜りながら、居間のソファに腰掛けた。

「しかし、よくそう毎日テレビばっか見てて飽きないね」

「まあな。お前達の世代と違って、俺達はテレビっ子だったからな」

確かに、インターネットが一般に普及してから十数年しか経っていないのだから、子供の頃からインターネットに触れていたり、学校でパソコン授業を受けてきた俺達の世代に比べれば、親父の世代は遥かにテレビに対する愛着が深いのかもしれない。

特に俺は『Wちゃんねる』で散々既存メディアの影の部分を見せ付けられているから、未だにテレビをよく見ている親父の感覚がちょっと信じられなかったりする。

でも、だからといって爺ちゃんのようないわゆる左巻きではなくて、『Wちゃんねる』に嵌まる俺にもある程度の理解を示してくれる、いわゆる『ノンポリ』であることは、親父自身が望むと望まざるとに関わらず、俺と爺ちゃんの間に生じた隙間を繋ぐ役割を果たしてくれていた。

親父自身はその役割を自ら進んで引き受けている訳ではなくて、むしろ嫌々だが仕方なくといった雰囲気漂浮を漂わせてはいるのだが。

「それにしても、またデモ騒ぎか……」

「ああ、今度は『移民受け入れ促進デモ』だそうだ。暇人だかなんだか知らないが、よくやるよな」

親父の言葉に『……全く飽きもせずによくやるよ』と思ってうんざりした瞬間、テレビ画面が突如切り替わり、別の場所を取材中らしきカメラ映像が飛び込んできた。

取材記者が緊張した面持ちのままレポートを始める。

「つい今し方ですが、**区〇〇町の〇〇坂交差点付近で、移民受け入れ促進賛成派のデモ行列と、近くの△△大学敷地内から現れたと思われる集団とが接触した模様です。どうやら謎の集団は移民受け入れ反対派と見られ、両派の接触地点を中心に暴動が発生したようです。デモ行進による不測の事態に備えて、警視庁も警備の人員を派遣しておりましたが、予想外の騒動の拡散に対応できずに、現在急遽応援の鎮圧部隊を編成中との情報が

入りました」

「△△大学っていったら、和紀の大学じゃないのか？」

「ああ、そうだけど、これって一体……」

テレビ画面で取材記者が状況説明をしている背後で、乱闘が行われているらしき様子が微かに映り込んでいた。

今し方と言ったから、まだ事態は発生したばかりなのだろうが、相当混乱しているらしき状況が窺える。

俺の頭の中には、ふと先程まで魘されていた夢の光景が思い起こされていた。

『移民受け入れ促進デモ』といえば、趙達に参加するらしいデモだ。

しかも、△△大学近辺となれば、亜沙子の住むマンションからもかなり近い。

あの夢の記憶があるだけに、亜沙子の事をこのまま放っておく訳にはいかなかった。

「親父。俺、これから大学へ行ってくる」

「お前、こんな騒動が起きてる時に何を言ってるんだ？」

「友達とか、ちょっと心配なんだ。夕方には戻るから」

俺はそのまま親父の返答も聞かずに家を飛び出し、毎日通学に利用する、勝手知ったるルートで大学へ向かった。

大学の最寄り駅より一つ手前の駅で降りると、全力疾走で亜沙子のマンションへ向かう。

以前、友人らと一緒に一度だけ訪れた事があったから、亜沙子のマンションの場所は知っていたが、それでも入り組んだ細い路地が縦横に走っていて、更には気が急いていた事もあったから、思わず道に迷ってしまった。

ふと思い立って、携帯電話を掛けようとポケットを漁るが、余りに慌てて家を出てきたので、携帯電話を自分の部屋のテーブルに置き忘れていたことを思い出す。

俺はその場で一旦深呼吸をして、焦る気持ちを何とか抑えつつ、以前亜沙子のマンションを訪れた時の記憶を頭の中から掘り起こした。

しばらくそのまま近辺を彷徨った末に、何とか目的のマンションに辿り着いた。

さすがにここまで来ると周囲は一見静まり返っているように見えたが、一步表通りへ出れば、騒然とした状況はますますエスカレートしているように思える。

今、ちょうど警察とデモ集団が衝突している所のすぐ裏を潜り抜けてきたのだ。

しかし、亜沙子のマンションは少々奥まった狭い路地の中に建っていたから、さすがに辺りは静まり返っていて、逆に薄気味が悪いくらいだった。

それでも、この状態ならば、きっと俺の見た夢や妙な胸騒ぎは単なる思い過ごしに違いない。

何の事前連絡もなしに、いきなり亜沙子のマンションを訪れてはちょっと迷惑かも……とも思ったが、顔を見に来たというだけでもよいと思い直すと、ちょっとドキドキして呼び鈴を鳴らした。

そのまましばらく待つが、応答はない。

——もしかしたら、どこかに出かけているのだろうか。

今日は休日なのだから、当然どこかへ出かけていても不思議ではない。

でも、せっかくここまで来たのだからと、もう一度だけ呼び鈴を鳴らしてみる。

それからまたしばらく待って、いい加減応答がないので諦めて帰ろうとした時、亜沙子の部屋の扉が勢いよく開いて、俺は向かい側の手すりに突き飛ばされた。

「いってえ！」

扉から何かが出てきて、その場で金属バットを投げ捨てるとそのまま階段の方へ駆けていったが、一瞬その影が振り返った時、どことなくあの中国人留学生の趙の面影に似ているような気がした。

俺の脳裏に不吉な予感が走り、動悸が激しくなった。

「亜沙子！」

俺は瞬時に亜沙子の身に異変が生じている事を感じ、慌てて扉を開けて亜沙子の部屋に駆け込む。

白いレースのカーテンの隙間から差し込む日の光に、柔らかく照らし出された部屋のほぼ中央に、一つの人影が倒れていた。

「亜沙子！」

そう一声かけて反応がないと知ると、俺は慌てて玄関に靴を脱ぎ捨てて、ピクリとも動かない人影の元に駆け寄った。

「亜沙子……」

俺の目の前の床に横たわっている亜沙子は、まるで今まで知っていた亜沙子とはまるで別人のように変わり果てていた。

血の気を失って青白く変色した顔は、きっと侵入者に加えられたであろう数々の残虐な仕打ちに耐えかねたように、激しい苦痛を訴えかけて醜く歪んでいた。

乱雑に肌蹴た衣服や、服の隙間から零れている透けるような素肌には、侵入者が亜沙子に加えた凄惨な陵辱の痕跡が、禍々しくもこれ見よがしに刻み付けられている。

——ああ、亜沙子はどんなに苦しく、悲しく、そして辛かっただろう。

俺は、きっとほんの少し前まで亜沙子だった筈の物の傍らに、肩を落として崩折れた。

あの夢は、きっとこの事を警告していたに違いない。

俺は、今この瞬間までその関連性に気づかずに、むざむざ亜沙子を卑劣な侵入者の魔の手に晒し、呆気なくその残虐行為の餌食になるがまま放置してしまったことを悔やみ、失ったものの余りの大きさに呆然としていた。

たとえ見た目の形が若干異なっていたとはいえ、ある意味あの夢は正夢だったのだ。

そして、先程この部屋から逃走した人影は、やはり見間違いや気のせいなんかではなくて、中国人留学生の趙本人に違いない。

俺は、夢で散々中国人の脅威を警告され、自分の身の回りの大切な人々に迫る危機を感じ取っていたにもかかわらず、大切な亜沙子を守ることが出来なかった。

力なくよろよろと立ち上がった俺は、亜沙子がきっと誰にも見られなくなっただろう、侵入者による無残な凶行に晒された姿を隠すために、ベッドの掛け布団をかけてやると、

朦朧とした意識のまま亜沙子の部屋を後にした。

扉の脇には、先程侵入者が捨てていった金属バットが無造作に放置されている。

——趙だけは、絶対に許さない。

俺は、足元に転がっていた金属バットを掴むと、階段へ向かって駆け出していた。

俺と卑劣な中国人共との果てしない戦いは、こうして始まった。

俺は、亜沙子を傷つけ、死に至らしめた趙を決して許さない。

そして、この国に巢食う中国人共を一掃しない限り、亜沙子への無残な凶行を防げなかった俺自身を、多分許せないだろう。

俺は、過去に犯した過ちを償うために、そして二度と同じ過ちを繰り返さないために、どのような手段を行使してでもすべての中国人をこの国から追放すると誓った。

(了)

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。